

王思文（オウ シブン）  
中国出身  
日本女子大学 文学部日本文学科

今年の春は新型コロナウイルスのため、花見も行けなかった。五年前、四月五日に日本に来た。日本語学校の最初のイベントとして、新入生たちは一緒に、新宿御苑へ行った。その時、初めて桜を見た。白っぽく、小さい花である。雨のようにサラサラ落ちていた。

最近は自粛のため、あまり外に出たこともなかった。偶然、近所の小学校を通り、楓を発見した。まだ春だが、楓を見ることは珍しいと思った。周りの桜の木の上で、まだ小さい桜が残っている。

桜は春、楓は秋。いつも頭の中にこのようなイメージがある。大学一年生の頃、講義で『万葉集』卷一・一六番の歌、「春秋競憐歌」という額田王の名歌を学んだ。



冬こもり 春さり来れば 鳴かずありし  
鳥も来鳴きぬ 咲かずありし 花も咲けれど  
山を茂み 入りても取らず 草深み 取りて  
も見ず 秋山の 木の葉を見ては 黄葉をば  
取りてぞ偲ふ 青きをば 置きてぞ嘆く そ  
こし恨めし 秋山我れは

と、春の山と秋の山の美しさを読んでいた。歌では、春秋の美しさの優劣を断ることではなく、その美への接近可能性において、「そこし恨めし」と残念な気持ちで「秋山我れは」と判定した。

一年生の時は、日本語がまだまだできていなかったため、歌の意味をうまく理解することはできなかった。この度、春に楓を見たところで、この歌を思い出した。

この数カ月間に、様々なことが起こっていた。故郷も閉鎖され、帰国もできていなかった。大学の新学期も、何回も延期され、不安な日々を過ごしている。

同時に、周りの人の優しさを感じた。先生、友人、皆様からの温かいお心遣いのおかげで、不安な気持ちが消えるようになった。好きな本を読んだり、短編小説を書いたりしている。この春は、花見に行けなかったが、春の景色と秋の景色が同時に見えた。

家族のところに戻れなかった私は、悲しみだけではなかった。嬉しいことも多くあった。友人との電話、優しいおばさんからの手紙、下田からの郵便物、様々な優しいことも感じていた。また、今年も、成長できるように、頑張りたいと思う。